

Miles Davis のアルバム “FOUR’ & MORE” の謎解き

長い間この “FOUR’ & MORE” については「何かちゃんと鳴らせていない」という感覚を持ち続けていました。他の盤ではこうした経験を殆どしたことがないのに、です。

同じコンサートで収録された “MY FUNNY VALENTINE”、これは言わば “FOUR’ & MORE” の双子盤ですが、オリジナル盤ではない「Columbia PC9106 (Stereo 9106)」という盤でも各楽器の音は鮮明に録られていますし、全体としての違和感はありません。

確かに “FOUR’ & MORE” のモノラル録音盤 (CL2453)、ただしファースト・プレスの 1A ではなく 1B ですが、には後年の LP や CD とは異なり各楽器の音が鮮明に収録されていました。しかしそのレベルは上記の “MY FUNNY VALENTINE” とどっこいどっこい、あの時代の COLUMBIA の優秀な録音エンジニアにとってはいわばフツートの水準だったのではないのでしょうか。しかし音質以外の「何か」が違っていました。

ここでひとつの謎に遭遇します。

なぜ “FOUR’ & MORE” の場合、現在でもモノラル録音盤 (CL2453) の市場評価が高くステレオ録音盤 (CS9253) の評価が低いのでしょうか。米国の中古盤で4倍程度の価格差があります。

同じコンサート、同じ録音機材、同じエンジニアなのに何故？というわけです。

マスタリングをする録音音源は同じマルチトラックの音源ですし、当時のレコード業界の「雄」である COLUMBIA のエリートエンジニアがステレオ盤の制作について手を抜いたとは到底考えられません・・・何か間違いでもあったのでしょうか。

いろいろ調べた結果は以下をご覧いただきたいのですが、考えられる理由のひとつは：モノラル盤の制作では、演奏にプラス α となる「ある種の演出」がステレオ盤の制作に比べて比較的ラクに出来た、なおかつ当時のエンジニアがそのやり方に熟達していた、ということです。

ステレオ盤の制作の場合、そうした演出は各楽器の定位がずれるなどの問題があり、難しかったのではないかと思います。

モノラル盤の “FOUR’ & MORE” が作品としての完成度を (ステレオ盤に比べて圧倒的に) 高めた理由はこうしたことにあったのではないのでしょうか。

ジャズでも比較的少人数で、各楽器がソロを順番にとってゆく場合、必ずしもステレオ録音である必要性はなくモノラル録音に対する優位性は低かったのではないかと思います。

COLUMBIA 自体、モノラル録音の “FOUR’ & MORE” については（その出来栄えに）相当な自信を持っていたようで、そのことが伺える文章をご紹介します。これはオリジナル盤ジャケットの裏面下の方に記載されているものです。なお、オリジナル盤でもステレオ盤の場合、勿論こうした文章の記載はありません。

「This Columbia high fidelity monaural recording is scientifically designed to play with
（＝演奏する） the highest quality of reproduction （＝再生） on the phonograph （＝蓄音機） of your choice, new or old.

If you are the owner of a new stereophonic system, this record will play with eve more brilliant true-to-life （＝真に迫る） fidelity （＝忠実） .

In short, you can purchase this record with no fear of its becoming obsolete （＝旧式な） in the future. 」

要するに「このモノラル録音盤は、ステレオ装置でもイケルし、ステレオ時代でも陳腐化しませんよ」と宣言しています。ただし “scientifically” とは一体何？分かりません。

1 演奏の背景

まずは「資料 2 LP / CD リスト」の SICP10087 の訳文(オリジナルは CK93595)からジョン・エフランドの文章を引用します：

「その晩、演奏された音楽にはどこか特別なところがあったのだ。

そうなった背景にはコンサートをとりまく状況もあった。

それはミシシッピ州とルイジアナ州の有権者登録のためのベネフィット・コンサート（黒人地位向上協会、人種平等会議、学生非暴力調整委員会が後援）だった。

マイルスはノーギャラで演奏することを独断で決め、ステージにあがる直前の楽屋でその旨をバンドに告げた。

そんなありがたくないニュースがバンドを『くそいまいまいくらいに激怒させた』のだったとマイルスは言う。

『おかげで全員のプレイに熱くびりびりとした緊張感が生まれたんだ』

次は「マイルス・デイビス自叙伝Ⅱ」（クインシー・トループ著 中山康樹訳 宝島社 2000 年）です。

p. 84 から p.85 にかけて（18 行にわたって）マイルスがこの夜の演奏について述べて

います。彼がこの演奏を高く評価していたことが分かります。例えば、
 「その夜のオレ達の演奏は、まさに天井をぶっ飛ばしてしまいそうな勢いだった。
 みんなが、本当に一人残らず全員が、ものすごい演奏をした。
 曲はほとんどがアップ・テンポだったが、ただの一度も狂わなかった。
 ジョージ・コールマンもこの夜が最高だった。」

だからこそ言いたいのです。「演奏のエネルギーが感じられないレコードは何かがおかしい、ダメなのだ」と。

2 演奏会場の音響

再びジョン・エフランドの文章を引用します：

「ハービー・ハンコックは、あの一種独特の雰囲気を作っていたのはステージのせいもあるという。

『あの会場の音響はちょっと変わっていた』と彼は言う。

『あそこで行われた初めてのジャズ・コンサートだったんじゃないかと思う。ステージの僕らにとっては最悪の音響だった。

自分で弾いたコードの音が完全に消えてなくなるまで、他の音が聴こえないんだ。だからすごく慎重に演奏していたよ。

コンサートの前半を終わってステージを下りる頃にはすっかり気が滅入ってしまって、後半を迎える気分ではなかった。最悪の結果も覚悟していた。

ところがあとになって、その時のテープを聴き、一体いつのコンサートだ！？と思ったよ。

どうすれば音響の悪さに紛らわされることなく演奏できるか、そのことを強く思えばこそエネルギーが生まれたのかもしれない。

音楽にフリーで自由な空気を持ち込もうとするバンドの姿勢もあった。

でも音楽がまともに聞こえなかったらそんなこともできるわけじゃないか！？』

3 ステージ上のミュージシャンの配置とマイクアレンジ (CK93595 の写真による)

ステージ正面に向かって、

左端に **Herbie Hancock (p)** : マイクは中高域弦へ向け 1 本、反射板へ向け 1 本

センター後方に **Ron Carter (b)** : マイクはベースの中低部へ向け 1 本

右端に **Tony Williams (ds)** : マイクはシンバル群上部に 1 本

ステージ前面の左側に **George Coleman (ts)** : マイクは 1 本

ステージ前面の右側に **Miles Davis (tp)** : マイクは 1 本

マイクの本数は上記に加え、司会者用に1本、会場のアンビエンス用に1本必要なので、総計は少なくとも8本となります。

4 録音エンジニア・機材など

CK93595によれば、ORIGINAL RECORDING ENGINEERはFRED PLAUTだと紹介されています。

関連情報となりますが『レコーディングスタジオの伝説』（ジム・コーガン/ウィリアム・クラーク著 ブルース・インターアクションズ 2009年）の第13章、『COLUMBIA STUDIOS TEMPLE OF SOUND』によれば、50年代の中期から80年代にかけて7番街と30丁目のスタジオは基本的に4人のエンジニアによって切り盛りされていたそうです。

その4人とは、フランコ・ライコ、フレッド・プラウト、スタン・トンケル、ロイ・ハリーです。

特に最初の3人はマイルスのアルバム“Kind Of Blue”、“Sketches Of Spain”、“Porgy And Bess”、“Bitches Brew”の制作に関わったとのこと。

実際、『MILES DAVIS KIND OF BLUE 50TH ANNIVERSARY』（SONY BMG MUSIC ENTERTAINMENT 2008年）で紹介されている“Tape Identification Data”には Engineerとして“FP-RW”とサインされています。

注）RWは補佐のロバート・ウォーラーです。

また録音全体の ProducerはIT（アーヴィン・タウンゼント）。

次に機材です。COLUMBIAのスタジオではテレフンケン（=ノイマン）のチューブマイクM-49、M-47、U-67が用いられ、コンソールは特注のCBSコンソール、テープレコーダーはアンペックスということなので、このライブの収録についてもそうした機材が持ち込まれたのではないのでしょうか。

再度自問自答します。何故、後世に制作されたレコードなりCDがモノラルのオリジナル盤の水準から大きく落ちてしまったのか？

それは基本的に作品としてのアルバム全体をまとめる方向性を見失っていたからだとも思われます。あの特殊な状況下での演奏現場に居合わせなかったから仕方がないといえどそういうことにはなりますが。

加えて、欠点が多いオリジナルのステレオ盤を規範としてしまったことが原因、これが結論です。

資料1 COLUMBIA からステレオ録音盤とモノラル録音盤が同時並行発売された
マイルスのアルバムリスト

No	アルバム名	発売年	モノラル盤	ステレオ盤
1	Porgy and Bess	1958	CL1274	CS8085
2	Kind of Blue	1959	CL1355	CS8163
3	Sketches of Spain	1959-1960	CL1480	CS8271
4	Someday My Prince Will Come	1960	CL1656	CS8456
5	In Person – Friday & Saturday AT THE BLACKHAWK, SANFRANCISCO	1961	C2L 20	C2S 820
6	Miles Davis at Carnegie Hall	1961	CL1812	CS8612
7	Quiet Nights	1962-1963	CL2106	CS8906
8	Seven Steps to Heaven	1963	CL2051	CS8851
9	Miles and Monk and Newport	1963	CL2178	CS8978
10	Miles Davis in Europe	1963	CL2183	CS8983
11	My Funny Valentine	1964	CL2306	CS9106
12	‘FOUR’ & MORE	1964	CL2453	CS9253
13	E.S.P.	1965	CL2350	CS9150
14	Sorcerer	1967	CL2732	CS9532

注) 何故いろいろ利点もあるモノラル盤が姿を消したのか、それは Columbia の場合だけに限りませんが、一言でいえばレコード会社の経営合理化の一環だと思います。

資料2 LP / CD リスト (古い順)

(1) Columbia CL2453

－残念ながら “‘FOUR’ & MORE” に関してはこのアルバムを聴くしかありません

(2) Columbia CS9253

－楽器の定位が実際の演奏とは違ってきます：

マイルスがセンター、ジョージ・コールマンは右手のトニー・ウィリアムス
とセンターの間になっています、これはいかにも不自然です

しかし、この配置は後々の CD、LP で踏襲されていくことになります

－モノラル盤と比べて B 面の音圧が落ちています。これも踏襲されることになります

(3) CBS・ソニーレコード SOPL 161 [Stereo] SX68MARK II

－発売年不明ですが、CD が出現する 1982 年以前の可能性があります。

－曲目解説は野口久光氏

(4) SME(Japan) Records SRCS9707 DSD マスタリング

－1996 年 July の岩浪洋三氏の曲目解説

- リーフレットの表裏に使われているレコードジャケットの縮小写真は
SME RECORDS Stereo SRCS9707 のもの
- しかしプラケース裏面のジャケット縮小写真は STEREO と記載されているが
SME のものではない
- ステージ写真は無い

(5) COLUMBIA / LEGACY CK93595

- プラケースに「MILES 50 YEARS COLUMBIA」のシールが貼ってあるので
Miles と COLUMBIA の契約が 1955 年ならば 2005 年頃の発売ではないか
- リーフレット p.14 に録音エンジニアなどについて記載がある：
 - ORIGINAL RECORDINGS PRODUCED BY TEO MACERO
 - ORIGINAL RECORDING ENGINEER : FRED PLAUT
 - REISSUE PRODUCED BY MICHAEL CUSCUNA AND BOB BELDIN
 - REMIXED AND MASTERED USING DSD TECHNOLOGY BY MARK WILDER
SONY MUSIC STUDIOS, NEW YORK
- リーフレットに収録されている文章は、オリジナル・ライナー・ノーツ（2編）の
他に “FOUR' & MORE” (John Ephland Fall 2004)
この文章では演奏の背景、会場の音響、録音の出来栄えに関するマイルスあるいは
ハービー・ハンコックのコメントなどが紹介されている
- リーフレットにはオリジナル LP の裏面が掲載されているが、「STEREO」と表記
されているにもかかわらず、COLUMBIA マーク下のレコード番号はモノ盤の
「CL2453」となっている
- 本アルバムにはステージ全景写真が2枚掲載されており、マイクアレンジの様子が
分かる

(6) Sony Music Japan SICP10087 Stereo DSD Mastering (SACD/CD ハイブリッド盤)

- 本アルバムは基本的に上記 CK93595 のコピー（=和訳版）、音源は全く同じ

(7) Mobile Fidelity Sound Lab, Inc. ORIGINAL MASTER RECORDING No.001272

- Mastered by Krieg Wunderlich, assisted by Shawn R. Britton at Mobile Fidelity
Sound Lab, Sebastopol, CA on THE GAIN 2 ULTRA ANALOG SYSTEM
- オリジナル・マスターが何を意味するのか、マルチ・チャンネルで録音された音源
かステレオ盤のマスターかは不明

以上